

# 「気が遠くなる」「本気で泣いた」……皆に悪戦苦闘の過去あり 養老孟司、上野千鶴子、坂東眞理子があの著名人 たちはこうして「英語の壁」を乗り越えた

今、国際舞台上で活躍している人々も、最初からペラペラ、だったわけではない。皆、英語と格闘し、悩み、苦しんだ過去がある。中には、十分世界で通用する英語力を持っているのに、今でも苦手意識を持っている人もいる。英語を操る多くの日本人研究者に、彼らが体験した「英語の壁」についてインタビューした英文校正サービス会社代表の古屋裕子氏が、その秘話を公開する――。

グローバル時代の今、日本



人が英語を使う機会が毎日増えています。学術分野では、理系はもちろん、文科系研究者も英語論文を書く機会が多い。しかし、日本人研究者がネイティブレベルの英文を書くのは難しいことです。そこで弊社では、日本のビジネスマンや研究者向けに「英文校正サービス」を提供しています。

しかし、実は私自身、英語がとても苦手でした。留学経験はなく、英語の勉強と言え



最初からペラペラだった人はいない(左から、養老孟司氏、上野千鶴子氏、坂東眞理子氏)。



養老氏にインタビューをする古屋氏。

ていると、別の機会にハッといい表現に出会うことがある。「そうすると、いったん論文を作り上げて、当時は修正ができないタイプライターです。それから、何度も頭から打ち直すことになるんですよ。これが大変。もう、英語なんてばかりやろうと思うんですよ」

養老さんは、こう笑いながら振り返っていました。心からの叫びだったと思います。とはいえ、手間をかけた作業の繰り返しで、英語のリズムや言い回しを身に付けてい



明石康氏は「語学力だけではなく人間としての総合力が問われる」と語ったという。今でも国際会議の前になると悪夢を見る(酒井啓子氏)。

さんは「これは、英語では太刀打ちできない」とつくづく感じたそうです。「日本語だったら絶対に負けない」という自信があったから悔しかった」という思いをバネに、帰国後の上野さんが八面六臂の活躍をされているのはご存じの通りです。

中東研究者の酒井啓子さんも、国際学会における発表では失敗続きで、「何が言いたいのか?」という聴衆の冷ややかな態度にさんざん苦しんでき

いものでした。上司の話すことが聞き取れない、伝えたいことが話せない。

一方で、会社の顧客である日本人研究者やビジネスマンが、英語で苦勞しているのも、身近に感じていました。

それなら、今では世界で活躍している著名な研究者たちだつて、かつては、英語に悪戦苦闘した経験があるのではないか。彼らがどんな「英語の壁」に直面して、どう乗り越えたかを聞くことは、私たちの顧客にも、私自身にも、参考になるに違いない。そう考えて、著名研究者たちのインタビューを始めたのです。

英才チンパンジー「アイチヤン」の研究で知られる動物学者、松沢哲郎さんのお話も印象的でした。

京大大学院の哲学の試験では西洋哲学史の3巻組の本を、すべて英語で丸暗記して臨んだそうです。にもかかわらず、試験問題を目にして理解でき

このように、一流の研究者でさえ、「読み書き」の勉強には大変な時間と労力を費やしてきました。しかし、彼らが本当に苦しんだのは、「話す、聞く」ことだったようです。

「おひとりさまの老後」などで有名な社会学者の上野千鶴子さんは、英語の読み書き能力は自信があり、大学院生時代は仲間の論文を英訳するアルバイトをするくらいでした。

そんな上野さんでさえ、「話す、聞く」の壁は高かったらしく、「英語圏で勝負するのを断念した」と仰っていました。

上野さんは、初めて海外に出たのが、33歳からの米国留

いた33歳でアメリカ留学をした上野千鶴子さんなど、つまり、大人になってから、本格的に英語圏の洗礼を受けた方々に話を聞いたのです。

それぞれのお話を伺うと、実際に直面した「英語の壁」は様々でした。

中でも英語の「読み書き」に関しては、誰もが受験で経験したような困難を、正攻法で乗り切られたことがよく分かりました。つまり、英字新聞や専門書の原文を「とにかく読む」「単語をひたすら暗記する」などの努力をコツコツされた方が多かったのです。

養老さんは40数年前、博士論文で初めて英語論文に取り組み、「気の遠くなるほど膨大な時間を費やした」そうです。

たのは「それが英語だということと、スピノザという人名だけ」だったそうです(笑)。

それでも、問題文を何度も読むうちに「意味が見えて」きて、なんとか文脈が理解できたそうです。それから、20代初めの頃に哲学の英文テキストを読み漁ったことが英語の基礎体力を鍛え、おかげでの中に彼のフィールドである自然科学のテキストを読む時には、楽だったそうです。

「日常的な会話が全くできなかったんです。私は一生懸命しゃべっているのに、たとえば、スーパーマーケットレジのお姉さんがけんもほろろな扱いをするんです。

「Pardon me? (なんですか?)」「Say it again. (もう一度言ってください)」「I can not hear you. (聞き取れません)」「これを1日に1回は必ず言われる。1回ならまだ許容限度でしたが、3回言われたら、精神的に参ります。毎日つらい思いをしました。本気で泣きました」

大事なのはネイティブレベルの上手な英語ではなく、通じる英語なのだ、と語っていました。

お話を伺った全員に共通するのは「自分の専門分野にお

「日本語だったら絶対負けないのに……」  
上野千鶴子

「分かったふりをする」ことが「一番いけない」  
福島孝徳

上野さん、酒井さんのような苦勞話を多く聞いた一方で、「神の手を持つ男」の異名をとる脳外科医、福島孝徳さんのお話にはとても親しみを覚えました。

取材直前、ネイティブと思われる福島さんの秘書から、少し先のウクライナでの手術のポイントメントが電話で入ったのです。偶然、福島さんがその対応をしている場面に立ち会ったのですが、発音が、カタカナ英語、だったのが驚きました。しかも、複雑な言い回しは一切なく、「イエス、アイウィルゴトトウウクライナ」など、必要最低限の短い言葉が発するだけ。



クリムゾン・インタラクティブ ジャパン代表 古屋裕子 FURUYA Yoko

「英語なんてばかやろうと(笑)」  
養老孟司

こんな風に語っていました。「昔はインターネットもありませんから、英文を書くには、ほかの文献を読むしかない。自分の言いたいことに近いことを言っている箇所につづかるまで探して、そこから表現を拾ってくるんです」

運良くいい表現に出会えればいいのですが、出会えないままに知っている表現をつなげて原稿を作り、作業を進め

それでも、さすがは上野さん。「腹をくくって自分をさらけ出す」「開き直ってしまえば赤ん坊と同じで「口写し」。相手の言う通りに言う」という方法で耳が慣れると、留学先の環境を物足りなく感じ、ご自身の研究活動にさらなる刺激を求めて、ノースウエスタン大学からシカゴ大学への移籍を自ら願いました。

ところがシカゴ大学では、新たな壁に直面したと言います。同大学では、全米から研究者が招かれてスピーチする「マンデー・コロキウム」という公開講演会があり、これが大学の空きポストの教員採用試験になっているそうです。

ですから、真剣勝負。「スピーチが終わるとデイスカッションがあり、そのあとの質問タイムも壮絶。大学院生や若手研究者が、先輩格のスピーカーの揚げ足を取るような意地の悪い質問をする。いかに相手のスキをつくるか、虎視眈々と狙って。そういう時に、一流の研究者は、真正面から受けてロジカルに答える場合もあれば、フェイントをかけた後、逆襲したり、わざと答えなかったりとか」

それを間近で見ていた上野

いて、世界に向けて語る言葉」を持つていることです。

国連事務次長など長年にわたり国連で活躍された明石康さんも、「口先だけの語学力では国際舞台での信頼は得られない。問われるのは、知識や教養、世界観など、人間としての総合力である」と仰っていました。

「キレイな発音より内容を理解して喋る」  
坂東眞理子

あるべき」と語っています。このほか、元宮城県知事の浅野史郎さん、宇宙飛行士の古川聡さんなど総勢12人のインタビューを終えて、多くの日本人にとっての「英語の壁」とは「ネイティブのように上手にしゃべりたい」という自分の気持ち、願望」なのではないかと感じました。

これから英語に取り組もうという方々には、こうした気持ちや捨て去り、下手でも臆することなく自分をさらけ出して、自己流の英語でも「通じればよい」と開き直る強さを持つてほしいですね。そうすれば、きっと相手に「通じる英語」になり、英語の壁を乗り越えられると思います。

【PROFILE】1977年、千葉県生まれ。筑波大学第一学群人文学類卒。出版社勤務などを経て、07年より英文校正サービスを提供するインド法人クリムゾン インタラクティブ勤務。現在、同社の日本法人の代表取締役。編纂に、上記インタビューをまとめた「英語のパカヤロー! ―「英語の壁」に挑んだ12人の日本人」(泰文堂刊)。